

昭和7年(1932)に発足して以来、大正区は「ものづくりの街だ。まわりを見渡せば、海と川に囲まれた豊かな水運。歴史をたどれば、名だたる自動車工場に造船所、貯木場に鉄鋼所が拠点を置いた。そして今、近代大阪産業の記憶を受け継ぐ企業が大正区を支えている。熱気たちこめる現場と、ものづくりに生きる人々に会いに行ってみよう。

※工場見学の際は必ず大正区役所(03-4704-0001)の予約が必要

溶断

日本のものづくりを支える「溶断三兄弟」



1 大中工業

「小さい時から工場が遊び場で、よく職人さんに『危ないぞ!』と怒られてました」と笑うのは、取締役の山本雅章さんだ。雅章さんは三兄弟の末弟で、上のお兄さん二人が社長と常務を務める。大中工業が提供するサービスは鉄板の「溶断」。ガスで真っ赤に熱した鉄に高圧酸素を吹きかけると、ゲーキのクリームのように溶けた鉄が吹き飛び、思い思いの形に切断できる。切った鉄の素材を元に、自動車の部品メーカーなどが金型を製作する。「厚い鉄を切るにはコツがあります。鉄の色やガスの音を注意深く見て聞いて切らないと、切断面が汚くなってしまいます」。熟練した9人の現場の職人さんの中には勤続42年という大ベテランもいる。「先代はよく『早い上手い安い』がうちの売りと言っていました。短期間できれいな製品を作るのがモットーです」。

鉄とともに大正で育った三兄弟が、抜群のチームワークで日本のものづくりを支えていく。
●大正区三軒東2-11-23
☎06-6553-3733



切断したい部分をガストーチで溶かし、高圧酸素を吹きかけて溶断していく。

2 三立電器工業

三立電器工業が製造・販売するのは、プロ用の電気溶接器具。社長の藤本昌巳さんは「300アンペアもの電流が流れる溶接機器は、万が一感電したら即死する可能性があります。そのため、JIS規格および労働安全衛生法による規定があり、それに適合した安全な溶接棒ホルダやケーブルジョイントなど各種製品を生産しています」と語る。建築、造船、橋梁メーカーなどが主なユーザーで、三立電器工業の業界シェアは国内で60%を占める。藤本社長は機械好きで、工場内のいくつかの工作機械も自作。「日本橋の電気屋で配線を教えてもらいながら、社内のものづくりが好きな連中と一緒に作りました」。自慢の施設は昨年改装した宿直部屋だ。ホテルのようにきれいな部屋の壁には、大画面テレビと映画のDVDがずらりと並び、「せっかく入社してくれたんだから、社員には楽しんで働いてもらいたい」という藤本社長。サポートするのは息子で営業部の副司理さん。「自分には溶接業界以外の分野でも製品開発をしたい」と話してくれた。

●大正区泉尾6-5-53
☎06-6552-1501
http://sanritsu-e.com

国内の溶接器具の6割を作る社員思いの町工場

溶接機器



鋼板

鋼板を作り続けて60年 大正工業会の重鎮企業



3 大阪鋼圧

昭和29年(1954)創業の同社、現社長の榊田英紀さんは、大正工業会の会長を10年以上にわたって務める。毎年区内の高校から社員を採用する、地元密着企業でもある。大阪鋼圧の作る製品は「鋼板」。まるでトイレットペーパーのように何重にも鉄が巻かれた重さ最大25トンもある円筒形の素材を、巨大なローラーで引き延ばし、歪みをとって、切断して、オーダー通りの寸法の鋼板に成形していく。鉄内部の「内部応力」をきちんと取らないと製品に歪みが出るため、見守る工具は細心の注意を払う。「うちの強みは13ミリの厚い鋼板も加工できることと高い品質です。熟練の検査員がわずか0.03ミリの疵も見逃さない、万全の検査体制を整えています」と言うのは入社15年目の総務部・榊田芳久さん。鉄の一番の敵は結露。あつという間にサビのため、寒暖の差が激しい季節は大変だそう。出荷された鋼板は機械などの金属製のフェーン、建設機械、建物の骨組み、鋼製の家具などに姿を変え、私たちの暮らしを支える。
●大正区泉尾7-1-11 ☎06-6554-0320 http://www.kowaz.co.jp



工場に設置された湿度計。鉄にサビをもたらす湿度は大敵だ。

五百社が頼りにする 歯車のプロフェッショナル

4 南歯車製作所

昭和23年(1948)、大正区で創業した南歯車製作所は、長い軸の付いた歯車や歯車から派生したスプラインという加工で、抜群の実績と技術を持つ会社だ。太さ10~400ミリ、長さ7000ミリ程度まで、オーダーに応じて加工する。加工業者の少ない歯車車も自社加工できる。「長さ2000ミリ以上の極細スプラインを加工できる会社は、全国でもほとんどないですよ」と胸を張るのは三代目社長の南仁さん。「町工場って暗い雰囲気のところが多いので、うちはみんなが明るく元気に働き、地域に無くてはならない会社になりたい」と語る熱血漢だ。売上の約半分は同業他社からの注文で、「長い歯車とスプラインのことなら南さん」と日々依頼が舞い込む。「相談が多いのは、産業機械の破損した歯車部品の復元ですね。図面が残ってなくても一から計測して作り直します」。

南社長の最近のテーマは「人を育てること」。12名の従業員と、セミナーなどで勉強しながら楽しくやりがいのある「全員経営」の町工場作りを進める。
●港区弁天6-4-31 ☎06-6576-2521
http://m-haguruma.sakura.ne.jp



歯車部品



「職人の手による汎用機にしかできない価値を追求しています」と語る南社長。

バルブ



戦艦武蔵にも製品を納めた国内屈指のバルブメーカー

5 ウツエバルブ

応接室に飾られた、全長1.5メートルの迫力ある「戦艦武蔵」の金属模型。昔ウツエバルブにいた社員が手作りでしたものだ。同社は戦艦武蔵に製品を納入した歴史を誇る、日本有数のバルブメーカー。片手に乗るサイズから人が数人くぐれる大きさまで各種バルブを取り揃える。「戦前は造船所が中心でしたが、今は日本全国の発電所とプラントメーカーが主な顧客です。国内原子力第一号の敦賀発電所をはじめ、日本のほぼすべての事業用発電所にうちのバルブが入っていると思ってもらって間違いありません(技術部長の植田浩夫さん)」。高温・高圧の液体気体が流れるバルブに万が一のことがあれば事故につながるため、何より安全を重視する。「この頃はコスト削減のため海外から資材を調達する会社も多いですが、うちは絶対に国内資材で製品を作ります。それが信頼につながっていますね」。



工場の一部には、昭和の歴史を彷彿させる木造トラス構造がそのまま残っている。

●大正区北村2-1-13
☎06-6552-3161
http://www.utsue-valve.co.jp

壁紙で世界を変える 大正区最注目ベンチャー

6 フィル

2015年10月に大正区小林西の港にできた、輸入壁紙の専門店「WALPA」。美術館やブランドショップに見えるこの店は、東京・銀座などに5店舗を運営するフィルの本社を兼ねる。大正駅から直通の専用バスを走らせ、広い店内では定期的に「壁紙貼りワークショップ」を開催。店舗の前には小さな公園を作り、家族連れが集まる。「住宅のリノベーションが流行ってますが、多くの方は業者任せっぱなし。自分で壁紙を変えると空間が劇的に変わり、自分の家をもっと好きになる。人類みな自由に壁紙を貼り変えて、笑顔あふれる世界にしたい」と語る濱本廣一社長は、元紙職人。毎日、白い壁紙を貼るのに飽き飽きしていた17年前、ヨーロッパの美しい壁紙の存在を知ったことがきっかけで、前身となるワークショップを創業した。いまやDIY界で最も注目される企業の一つとなった。高校時代を過ごした大正区から、壁紙で世界を変えていく。
●大正区小林西1-15-12
☎050-3538-8903
http://walpa.jp



昨年できた旗艦店には個人客だけでなく内装のプロも集まる。



輸入壁紙

7 紀洋木材

マンションやビルなどの建築に使われる木材を始め、土木仮設用木材、梱包用木材、その他プラスチックから鉄まで色々な材料を扱う紀洋木材。「木のぬくもりを通じて、夢と希望を持てる幸せな企業を目指す」という企業理念を掲げ、年間を通じてソフトボール大会や社員旅行、地域のひととのバーベキューなどイベントも盛んに実施。大正区のものづくりフェスタにも積極的に協力を。社長の桑原健郎さんは中高大と陸上部の短距離選手だったスポーツマンで、関西ではトップクラスの選手だった。運動一で育ち、なんとお母さんはハードルで昭和27年(1952)のヘルシンキ五輪に出場したという。「母には負けますが(笑)、根が体育会系なので、社員には目標を持って自分の分野で力を発揮するようにと呼びかけています。時間厳守、約束を守るといった当たり前のことをきっちりやるのが仕事では大切ですね」と語る。
●大正区小林西1-16-2 ☎06-6552-6391 http://www.kiyolumber.co.jp

仕事の基本を重視する 爽やかな体育会系企業

建築用木材

